

## 世界の真珠王・御木本幸吉を調査



写真提供：ミキモト真珠島



きょうみ しんしん とば いろ  
興味津々鳥羽の色。

### 御木本幸吉とは

御木本幸吉は、1858年（安政5年）、志摩国鳥羽町大里でうどんの製造販売「阿波幸」を営む父音吉、母もとの長男として生まれました。

幼名は吉松といい、13歳で家業の傍ら青物行商を始め、17歳のとき、イギリスの測量船シルバー号が寄港した際、足芸（足の裏でおけの蓋を回す）を披露して卵や青物を売り込んだという機知に富んだ話が残っています。

1878年、20歳で家督を相続し、御木本幸吉と改名しました。同年3月に東京、横浜への視察旅行の際に、高価な値で取引されている天然真珠を見たことから、真珠の取引に関心を高めました。

その当時、海産物商を営んでいた幸吉は、志摩国海産物改良組合の結成などに参加して地元の産業振興に尽力し、三重県勸業諮問委員などを務め、地元の名士になっていきました。そして、1881年、23歳で元鳥羽藩士久米森造の長女うめと結婚しました。

1888年、30歳のときに、大日本水産会の柳橋悦を訪ね、指導を仰ぎ、アコヤ貝の養殖を始めました。その2年

後、1890年に東京帝国大学の箕作佳吉を訪ね、真珠の成り立ちと養殖法の説明を受け、真珠の養殖が可能だという確信を持ちました。

それから3年、試行錯誤の連続で苦しい日々が続きましたが、1893年7月11日、養殖を行っていた相島（現ミキモト真珠島）で、5粒の半円真珠が見つかりました。世界初となる養殖真珠の誕生でした。幸吉35歳のときでした。

そして、1896年には、箕作佳吉の協力で半円真珠の特許権を得ることができました。しかし、同年4月21日、一番の理解者であり、陰ながらに幸吉を支えてきた最愛の妻うめが32歳の若さで他界します。

その後も、苦境にめげず、半円真珠の発明から12年後の1905年、47歳のときに、ついに真円真珠を完成させ、特許権も取得しました。

幸吉は、真珠養殖の研究を進める一方で、東京銀座に世界で初めての真珠専門店である御木本真珠店を開設したり、パリ博覧会をはじめ、各博覧会への出品や、ロンドンに卸支店を開設するなど、積極的に世界へ真珠を広める活動を行いました。

また、真珠の養殖事業のみならず、尊敬する二宮尊徳の影響を受けて、伊勢神宮の内宮と外宮を最短距離で結ぶ御木本道路や、英虞湾と太平洋をつなぐ志摩市前島半島の深谷水道、南伊勢町の能見坂トンネルの整備など、志摩一円の開発にも尽力しました。明治天皇に拝謁した際に、「世界中の女性の首を真珠でしめてご覧に入れます」と言って周囲を慌てさせた幸吉ですが、見事にその言葉を実現させ、「世界の真珠王」と呼ばれるまでになり、1954年9月21日、96歳で亡くなりました。



鳥羽二丁目大里にある幸吉生誕の地

教育委員会生涯学習課

☎1268

